

1. 琉球及び台湾のスイシャホシクサは印度支那の *E. nigrum* と種的には区別し難いので変種に下す事にした。序ながら海南島のカイコウホシクサはむしろ典型的な *E. nigrum* と異なる所がない。
2. オホシラタマホシクサは種々の名で度々発表されて来たが (*E. Miyagianum* Koidz., 1914; *E. pterosepalum* Hayata, 1921, etc.), 結局旧世界の熱帯に広く知られた *E. sexangulare* L. と撰ぶ所がない。
3. *Eriocaulon Amanoanum* の種子の記載を補充し又産地を加へた。
- 4, 5. チゴザサ属の2新種を発表した。4の *I. lutchuensis* はハヒチゴザサに近いもの、5の *I. subglobosa* は日本のチゴザサに似たものであるが前者は葉の性質、後者は小穂の性質が主として異なる。
6. アリサンタマツリスゲは今度天野氏により琉球列島にも見出された。
7. オホシンジユガヤの学名は種々論ぜられて来たが、筆者等は *Scleria ciliaris* Nees を用いるのが良いと思ふ。

○マンシュウホタルイの一品 (檜山 庫三) Kōzō HIYAMA: A new form of *Scirpus Komarovii* Roshev.

甲斐国河口湖 (河口村地内) にマンシュウホタルイ (コホタルイ) で慶果の基下にある setae の平滑なものがある (1933 年筆者採集)。この型はまだどこからも報告されていないので、ここにメホタルイ (*Scirpus Komarovii* Roshev. forma *laevis* Hiyama) と命名する。尚、河口湖には setae に逆刺のある基本型はコホタルイの名で既に知られていた。ここに記すメホタルイの標本では小穂の出来がよく長さ 5-10mm で, setae はおおむね 4 本であるが時には 5 本のものを混じえ, その長さは慶果とほぼ同じか, 中の 1, 2 本が慶果の 1.5 倍位まで長い。本種はおそらく大陸から水鳥によつて移されたものであろう。

*Scirpus Komarovii* Roshev. in Kom., Fl. URSS. 3: 54 et 579 (1935).

forma **laevis** Hiyama, nov. f.

Setis hypogynis glabris. Cetera ut in typo.

Hab. Hondo: lac. Kawaguchi, Kawaguchi-mura, prov. Kai (Hiyama—Aug. 24, 1933—typus in herb. Nation. Sci. Mus. Tokyo).